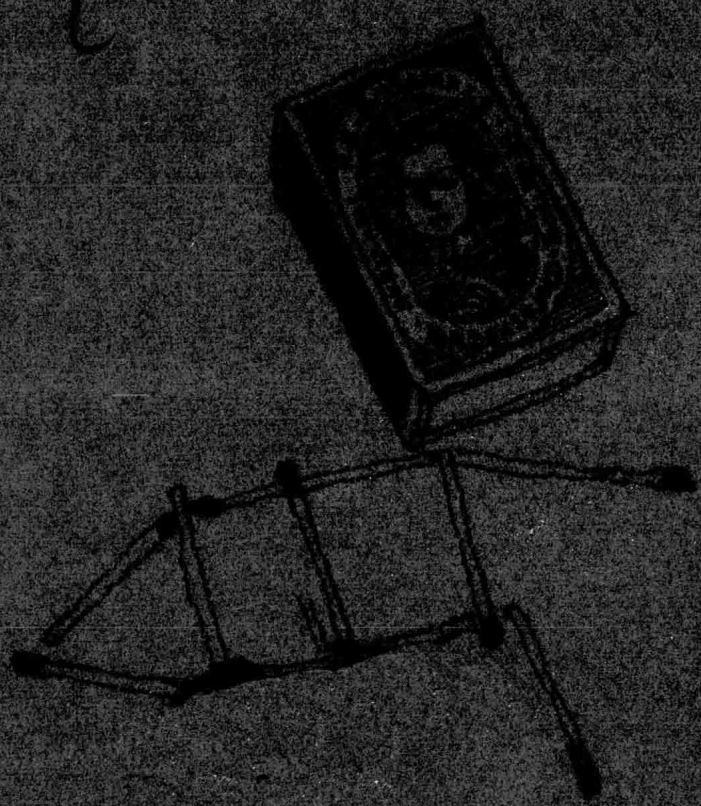
私の引出し

吉村　昭

文藝春秋

私の引出し

青村 昭



文藝春秋

私の引出し

一九九三年三月十五日　第一刷

著者　吉村昭

発行者　阿部達児

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　凸版印刷
製本　加藤製本

・落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい
・定価はカバーに表示してあります

©Akira Yoshimura 1993　Printed in Japan

ISBN4―16―347300―9

目

次

最初の引出し　小説の周辺

証言者の記憶　7
或る夫妻の戦後　12
伝記と陰の部分　21
ホームを走る　28
図書館　31
或る刑務官の話　35
小説の中の会話　42

二番目の引出し　歴史のはざまで

わずか百三十年前の事件　45
桜田門外の変と梅毒　48
彰義隊の戦い　51
江戸時代の伝染病　54
水鉄砲と浣腸　58
丁髷と牛乳　61
脚気と高木兼寛　66
ハワイ奇襲艦隊を眼にした女性　69
忘れられない眼　72
那覇市の理髪師　76
零戦は歴史の遺産　79
舞い扇　84
偶然からおこなわれた心臓手術　87
心臓移植と日本人　90
胃カメラと私　93

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三番目の引出し　街のながめ
行事・しきたり　99
癌の告知について　103
不意の死　107
掌の鼓膜　111
戦時という過去　116
むだにお飾りはくぐらない　119
後姿に涙ぐむ　125
鯛の頭　131
並ぶ　137
変貌の傍観者　141

四番目の引出し　遠い記憶
持て余している性格　146
困った記憶　151
日暮里のお医者さん　155
長いリヤカー　159
臀部の記憶　162
憂鬱な思い出　166
忘れられぬ雪合戦　170
幼稚園　173
露地　177
シーラカンス　181
階段教室　186
無名時代の私・遠い道程で十条　193
私の学歴　196
189

五番目の引出し　書斎を出れば
スポーツ好き・嫌い　200
総監督　204
熱い汁　209
この一言　213
小説家のお金　217
家出娘　220
鮨屋の話　223
落語家　227
咽喉もと過ぎれば……　231
自然であること　235
店主というもの　239

六番目の引出し　お猪口と箸
酒徒番付　245
酒を飲めぬ人　248
酒の楽しみ、そして、しくじり　253
なんでも食べる　257
風のうまさ　261
食事の途中で　266
佃煮屋　271
卵とバナナ　276
講演と食物　281

私の引出し

装幀　安野光雅

＊文末の数字は、発表された西暦と雑誌の月号、新聞の日付などを示します。
＊本文は発表時のものに若干の加筆訂正をしてあります。

最初の引出し　小説の周辺

証言者の記憶

昭和四十一年九月、私は『戦艦武蔵』という長篇小説を文芸誌「新潮」に一挙掲載し、それは単行本として出版された。

当時、その小説は記録文学の部類に入るものとされ、その後、『高熱隧道』『零式戦闘機』と書きつづけたが、いずれも記録を基本とした小説と扱われていた。ノンフィクションという分野の呼称はなく、それはかなり後のことである。

『戦艦武蔵』を第一作として太平洋戦争を背景とした戦史小説を八年間書いたが、『深海の使者』という「文藝春秋」に二年近く連載した長篇小説を最後に、私は、その種の小説を書くことをやめた。

戦史小説を書く場合、私は、その関係者を探り出して証言を得ることを基本とした。証言者の記憶が正しいかどうかを、尨大(ぼうだい)な戦史の記録によって裏づけし、事実を再現することにつとめたのである。

ところが、『戦艦武蔵』の場合、関係者が八〇パーセント近くはいて証言を得ることができたのだが、『深海の使者』では三〇パーセントほどしか会うことができなかった。わずか六年の間に、関係者の死が加速しているのを知ったのである。

さらに、『深海の使者』を連載中、お会いした百九十二名――これはいただいた名刺の数であきらかである――の関係者の方々に、出版された単行本を送ったところ、二十四名の方が二年ほどの間に死亡したことを、遺族から報されたのである。

証言を得ることで戦史小説を書いていた私は、これが限度であるのをはっきり感じ、書くことをやめたのである。

私は、八年間、戦史小説を執筆中、人間の記憶の確かさを感じる反面、いかに心もとないものであるかも知った。一例をあげると、記憶力のすぐれた或る戦艦の艦長であった人が、「その時山本連合艦隊司令長官をお迎えして……」と言ったが、その時期にはすでに山本五十六司令長官は戦死していて、記録からみても後任の古賀峯一長官であることはあきらかだった。

艦長は、しきりに首をかしげ、

「そうかなあ。山本長官だったがなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、繰返し言っていた。

このような例は枚挙にいとまがなく、そのため私は、一つの事柄に少くとも三人の証言を得て、正確を期した。

数年前、戦艦「大和」が撃沈された後、艦と運命を共にしたと言われていた艦長が泳いでいるのを見た、という乗組員の話が話題になったことがある。が、私は、それを見たのが一人だけであるということで、信ずるに足るものではない、と思った。記憶というものがいかに曖昧なものであるかを知っている私は、そのようなただ一人の話を信じることはできないのである。

『戦艦武蔵』について書いた『高熱隧道』は、私を戸惑わせた。

『戦艦武蔵』には、克明な造船所の建造日誌が現存し、さらにその背景をなす戦史の記録もある。しかし、『高熱隧道』の場合、そのトンネルを完工させた佐藤工業株式会社には設計図以外に記録はなく、当時の工事関係者の記憶によらざるを得なかったのである。

幸いに工事の総指揮者である技師と、工事を発註した電力会社の現場監督者が健在で、いわば最も好ましい証言者に恵まれていた。私はその二人と、他の関係者たちにも会って証言を得、新聞その他の記録で補強して執筆した。

しかし、事実に忠実を期しはしても、それは記憶によって構成されたものである。証言者はすべて信頼するに足る人たちではあったが、記憶につきもののまちがいは必ずあるはずで、たしかな事実を再現することは不可能だ、と思った。

そのため、私は佐藤組（現佐藤工業株式会社）を佐川組、工事に関与した技師たちをすべて仮名とし、単行本にした折にもその旨を「あとがき」に記した。

とかく企業には、過去を振向くことはせず、将来にのみ眼をむけている傾きがある。『零式戦闘機』を書く時も、それを製作した三菱重工の名古屋航空機製作所に行ったが、資料らしきものはなく、製作所側が熱心に探してくれて、ようやく倉庫の片隅から資料が出てきて、それを参考に書くことができた。

そうした経験を何度かしてきたが、丹那トンネルの工事を素材にした『闇を裂く道』という長篇小説を書いた時は、日本国有鉄道なのだから、まちがいなく資料はもれなく整備されて保管されていると信じた。

しかし、これも予想とはちがっていた。資料は各所に散らばっていて、私は、あれこれと指示を受けながら十個所以上も歩きまわらねばならなかった。国鉄ですら、このような状態なのだから、一般企業では過去の資料が散逸していても無理はない。企業は生き物であり、過去のものは排泄物として処理してかえりみない。それもやむを得ないことだと思う。

戦史小説を書くことをやめてから、私は、歴史小説を書くようになった。

歴史小説が戦史小説とちがうところは、証言者が皆無であることである。それに、史料といっても戦史小説の満ちあふれた量の資料とくらべると、比較にならぬほど少い。さらに、史料の中には信頼できるものとそうでないものとがあり、それを峻別もしなければならない。

事実に忠実にと願って戦史小説を書きつづけた私は、歴史小説に於ても同じ姿勢をとっている。それ故に、正確度の高い史料の残っている江戸中期以後の時代を背景にした小説を自然に書くようになった。

また、戦史小説で証言者と会い、その眼の光、言葉のひびきを見聞きしたように、現地へ旅をして、その地の空気にも直接ふれている。

たとえば松林がある、と史料に記されていても、それが赤松の林か黒松の林かわからなければ筆を進めることはできない。

注進の馬が駈けてゆけば、土埃（つちぼこり）が舞いあがる。土は黒いか赤いのか、それとも砂が多い地なのか、それによって土埃の表現も変る。

歴史小説は、歴史と冠するかぎり史実に忠実でなければならない。小説であるからと言って史実をいじってはいけない、史実そのものにドラマがある、と思っている。

小説にはさまざまな形があり、自由であるが、私の場合は、史実をあくまでも尊重することを自らに課している。

（「日本経済新聞」一九九〇・三・一一）

或る夫妻の戦後

戦史小説を初めて書いたのは昭和四十一年で、六年後に『深海の使者』という小説を「文藝春秋」に連載したのを最後に、書くことはしなくなった。理由については、当時、エッセイに書いたことがあるが、端的に言えば、証言者が少くなったことに尽きる。

戦場体験をもたぬ私は、戦史小説を執筆するにあたって、戦争の記録をあさるとともに、関係者の証言を得ることにつとめた。私の場合、証言を柱とし、その正否をたしかめるため記録を参考にして小説を書いていたので、証言者の数が減ったことは致命的であった。

一例をあげると、沈没した或る潜水艦の記録に、「乗組員二名救出セリ」と記され、私は、その旧乗組員を探し出して回想をきいたが、その要旨は左のようなものであった。

「艦ガ沈下シ、部屋ニ私ト他ノ乗組員ガイタ。電燈ガ消エテ闇ニナッタ直後、部屋ニ海水ガ激流ノヨウニ入ッテキタ。私ハ沈ミ、水面ニ浮キ上ッタ。天井ガスグ上ニアッタ。眼ノ前ニ、大キナ電球ノヨウナモノガ光ッテイル。何デアルカワカラナカッタガ、乗組員ノ顔デアルコトニ

気ヅイタ。海水ニ夜光虫ガ発生シ、ソレガ乗組員ノ顔ニハリツイテイル。私ノ顔ニモ夜光虫ガツキ、ヒリヒリシテ痛カッタ」

もう一人の救出された乗組員に会って話をきいてみると、やはりその人も、眼の前に球状の光ったものをみたという。「乗組員二名救出セリ」という記録の裏に、このような夜光虫の存在があり、それをきくことによって小説を構成した。

ところが、昭和四十一年に『戦艦武蔵』という戦史小説を初めて書いた折には、関係者が平均十名中、七、八名いたが、『深海の使者』の頃には、三、四名しか回想を得ることができなかった。わずか六年間に、物故した方が多く、証言者が激減したことを知ったのである。

このような理由で戦史小説の執筆をやめて十二年が経過したのだが、証言をして下さった方々の印象は、今でも強く残っている。岡田賢一氏も忘れがたい方である。

氏は、昭和十九年六月、一等兵曹として「伊号第三三潜水艦」に乗組んでいた。同艦は、昭和十七年六月十日、神戸三菱造船所で竣工された一等潜水艦であった。基準排水量二、一九八トン、全長一〇八・七メートル、速力二三・六ノット（水中速力八ノット）、備砲一四サンチ砲一門、五三サンチ魚雷発射管六門、魚雷数一七、偵察機一機搭載可能の伊一五型に属す。

完成後、第六艦隊第一潜水隊に編入、司令潜水艦としてソロモン諸島方面の作戦に従事した。その後、整備、補給のため太平洋最大の基地であったトラック島泊地に入港、故障個所の修理をうけている折、艦と工作艦との連絡不十分のため、後甲板のハッチが開いたまま艦を沈下させたので沈没。航海長以下三十三名が殉職した。

翌十八年一月二十九日、艦は浮揚作業をうけて海上に姿をあらわし、呉軍港に曳航され、工廠内で徹底的な修理工事をうけ、昭和十九年五月末日に完了した。

艦は、第六艦隊第十一潜水戦隊への編入が決定し、乗員が乗組み、六月一日から瀬戸内海で猛訓練を開始したが、訓練最終日の十三日午前八時四十分に、伊予灘由利島付近で沈没した。艦では、敵機来襲などの想定のもとに急速潜航訓練をくり返していたが、給気筒頭部弁に修理工事中に取り残されていた丸太がはさまり、閉らぬのに気づかず急速潜航をおこなったので、その部分から浸水し、沈没したのである。

司令塔にいた者のうち十二名が艦橋ハッチから脱出したが、救助された者はわずかに二名で、艦長和田睦雄少佐以下百二名が死亡した。岡田賢一氏は、奇蹟的に救助された一人なのである。

私は、もう一人の生存者である小西愛明氏を大阪にたずねた。氏の名刺には、一流商社の中堅幹部の肩書が印刷されていた。小西氏は海軍兵学校を卒えて少尉に任官、「伊号第三三潜水艦」に砲術長兼通信長として乗組んでいた。

岡田、小西氏から得た回想によると、艦が沈没した折、両氏は艦長たちとともに司令塔内にいた。艦長は、潜水艦について豊富な知識と経験をもっていて、艦を浮上させるためあらゆる手段を試みたが、効果はなかった。

艦は、いったん水深六十メートルの海底についたが、海底に艦尾をつけたまま艦首が海面近くまで浮き上った。艦は大きく傾斜し、岡田氏たちは物につかまって倒れるのを防いだ。気圧がいちじるしく上昇し、小西氏は左耳、岡田氏は右耳の鼓膜を破られ、むろん呼吸困難も激し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com